



現在の万寿寺山門（大分市）

## 大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

### 直翁智侃

豊後府内(大分市)の蔭山万寿寺は、1306(徳治7)年に鎌倉時代の武将で、大友氏5代の貞親が建立した臨済宗寺院です。大友氏歴代当主の庇護の下、中世の都市府内の中で最大規模の敷地を有し、室町時代には十刹に列せられて、日本を代表する禅刹の一つとして繁栄しました。

近年の発掘調査では、寺院内の区画に関連する溝や柱穴列が検出され、また大量の瓦や「万寿寺」と刻書した土器、「蔭山観音殿」と墨書した土器などが出土していて、その存在と栄華が考古学的に証明されています。長大な築地(塀)の内には山門、法堂、僧堂、鐘楼などの諸堂が並び、万年松、白蓮池、七歩橋などの「万寿寺十景」と呼ばれた名勝があり、山門前には「寺小路町」と呼ばれた門前町が栄えて、戦国時代には各地からの参詣客でにぎわっていた

ものと推測されます。門前町の発掘調査では、9世紀の越州窯系青磁や14世紀の青白磁梅瓶、16世紀の青磁酒海壺などの中国からの渡来遺物が多く見つかったことも、特徴的です。この臨済禅全国屈指の名刹の開山となったのが、直翁智侃です。直翁は、鎌倉時代中期の1245(寛元3)年の生まれで、中国南宋より渡来して鎌倉に建長寺を開いた蘭溪道隆に師事し、仏道を極めます。宋に渡って修行を積むとともに、日本では万寿寺のほか、筑前博多(福岡市)の承天寺や京都の東福寺などにも止住しました。その後、1322(元亨2)年に78歳で入寂。諡号(おくりな)は「仏印禪師」です。

直翁の下には多くの弟子が集まり、また万寿寺にはその没後、もたくさんの名僧が訪れていました。その背景には、大友氏という九州屈指の政治権力の強力な後

ろ盾があったからで、禅僧たちは万寿寺を拠点として中国への修行渡航を目指したのです。数百年に及ぶ隆盛を極めた万寿寺でしたが、1586(天正14)年、その大伽藍は灰燼に帰します。大友氏と対立した薩摩の島津軍が豊後に侵攻し、府内を占領して火を放ったのです。これにより、万寿寺も焼かれて廃寺となりました。

その後、江戸時代初期の1633(寛永10)年、府内藩2代藩主の竹中重義の援助により、寺は場所を移動して再興されました。現在の境内には本堂、庫裡、仏殿、禅堂、経蔵、観音堂、山門などが建ち、市指定有形文化財の国東塔も並びます。約700年前に直翁が開いた禅刹と、そこに集った禅僧たちの息遣いが、今も境内から聞こえてきます。(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

## 禅刹「万寿寺」の開山

11月1回掲載